

今月の人

県土整備部での勤務で思うこと

岩手県県土整備部 建設技術振興課総括課長

中田光雄



建設技術振興課総括課長の中田です。この4月に北上地方振興局企画総務部から異動になりました。県土整備部は、旧土木部時代を含めると3回目の勤務となります。

最初は、今の課の前身である建設振興課で、平成2、3年度の2年間建設業係長として勤務しました。当時は、バブル崩壊直後でしたが、世の中はまだまだバブル状態であったと思います。建設業界も同様で、今と全く違いむしろ人手不足の時代でした。その時代背景の下で、外国企業の参入などに備えて、建設業構造改革が叫ばれていて、担当係長として、「経営改善」、「OA」、「イメージアップ」の三つの委員会を作って運営して提案を取りまとめたのを覚えています。これが、その後の「建設業振興指針」などに少しでも役立ったのか残念ながら定かではありません。今再び因果が巡ってきている気がします。

2回目の勤務は、平成7、8年度の2年間、都市計画課の管理担当課長補佐でした。都市計画審議会や、開発許可、広域公園管理、屋外広告物条例などが主な担当でしたが、特に思い出深いのは、各地の都市計画決定に、事務の立場から参加したことでした。盛岡駅西開発では、マリオスのビルがまだ骨組み状態の時、工事用エレベーターで上階まで昇ってまだ何も無い周辺を一望したことは貴重な体験として忘れられません。

また、西南開発の起工式では、工藤前知事のご自宅に来賓祝辞をお願いに伺う課長に同行しました。前知事からは、「盛岡を日本の都市計画のメッカにして、外国の来客からも、盛岡を見たいと言われるような街づくりをしたかった。西南開発地区のメインストリートは真っ直ぐに岩手山を向いている形にしたかった」というような感想を述べられました。前知事の盛岡市長時代からの強い思いを吐露されたようでした。

この4月から、県内各都市に行く機会がありました。当時の都市計画決定をベースに町並みが整備されているのを見るにつけ、都市計画がいかに後の時代の指針になり、その一方で後世への責任がいかに重いものであるかを実感しています。

今回、再び建設業振興担当となりましたが、建設業懇談会などで県内各地を回って、リーダーの皆様から切実な逼迫した話を伺うにつけ、業界の置かれた環境がかつてとあまりに違うことに愕然としています。建設業者のことばは、どれも深刻で悲鳴に近いものに聞こえます。建設業者は地域の農業などと極めて密接に結びついて雇用の受け皿となっていて、地域貢献の取り組みについての自負や誇りが聞かれる一方で、もはや雇用を支え切れなくなっている現状から、ある種あきらめや投げやりにも似た心境にあるものと推察されます。このような地域の生の声に触れて、岩手の地域の今後はどうなっていくのだろう、との思いが募るのは私だけではないと思います。

今、「建設業戦略プラン」に沿って各地区に総合相談センターを設置するなど、県をあげての支援体制を整えたり、新たに「建設業懇話会」をスタートさせ、各分野のリーダーの方々からご意見・ご提言を頂くべく取り組んでいますが、何よりもまず、地域の建設業と関連する地域の雇用状況等を良く見、理解して、痛みを少しでも実感しながら、ミスマッチにならない実効性ある対策に取り組むことが求められていると思っています。その一方で、公務員はどこまで民間の現実を理解可能なのだろうかとの思いもぬぐい切れません。

